

ニタリクジラ 北西太平洋

Bryde's Whale, *Balaenoptera edeni*



管理・関係機関

国際捕鯨委員会 (IWC)

生物学的特性

- 体長・体重：12～15 m（上顎先端から尾びれ分岐点までの長さ）・20～25 トン
- 寿命：約 60 歳
- 成熟開始年齢：7～10 歳
- 出産期・出産場所：冬を中心・低緯度海域
- 索餌期・索餌場：中低緯度海域
- 食性：オキアミ、魚類
- 捕食者：シャチ
- その他：我が国周辺には太平洋沖合に分布する西部北太平洋系群と東シナ海～四国沿岸に分布し体サイズがやや小さい東シナ海系群が知られる。2003 年以降、両系群を *B. brydei* と *B. edeni* の別種に分類する研究が報告されている。両系群を別種とする分類が確定した場合、西部北太平洋系群は *B. brydei* に相当（東シナ海系群は *B. edeni*）。

利用・用途

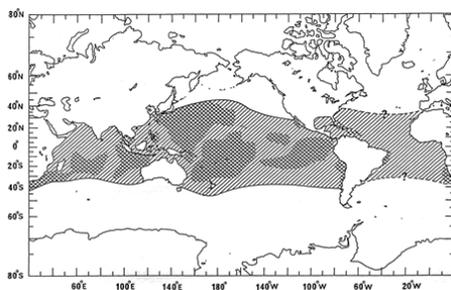
刺身、鍋、竜田揚げ、くじらカツ、大和煮など他のひげ鯨同様食用として利用される。かつて、他国では主として鯨油として利用していた。

漁業の特徴

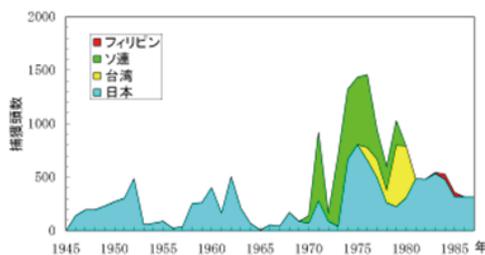
本種は我が国沿岸で 17 世紀（江戸時代）から古式捕鯨（網取り式捕鯨）で捕獲されていた記録があるが、19 世紀末に近代捕鯨（捕鯨砲による捕獲）が開始され、西部北太平洋系群を含む本種の捕獲が、三陸、和歌山、小笠原諸島近海を主漁場とした沿岸捕鯨によって、商業捕鯨モラトリアムへの異議申し立てを取り下げる 1987 年まで行われた。また沖合域では、第二次大戦後、我が国（1946～1952 年及び 1971～1979 年）と旧ソ連（1970～1979 年）が母船式捕鯨を実施し西部北太平洋系群を捕獲した。この他に、台湾（1976～1980 年）とフィリピン（1983～1985 年）でも散発的に沿岸で同系群を捕獲した記録がある。1988 年以降、全ての海域で商業捕鯨は停止されたが、我が国は 2000 年から第二期北西太平洋鯨類捕獲調査（JARPN II）を開始し、以降、JARPN II が終了する 2016 年まで沖合域で同系群の捕獲を継続して行っていた。

漁獲の動向

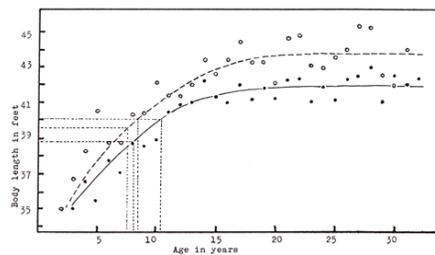
西部北太平洋系群は、我が国では 1946～1987 年の沿岸捕鯨で、およそ 7,100 頭（年平均 170 頭）、母船式捕鯨で 1946～1952 年に約 1,300 頭（年平均 190 頭）、1971～1979 年に約 2,700 頭（年平均 300 頭）を捕獲した。この他に、旧ソ連が母船式捕鯨で 1970～1979 年に約 4,100 頭（年平均 410 頭）、台湾が沿岸で 1976～1980 年に約 1,500 頭（年平均 290 頭）、フィリピンが沿岸で 1983～1985 年に約 100 頭（年平均 30 頭）を捕獲した。2000 年以降の我が国の JARPN II では 2013 年まで年間 50 頭の捕獲上限のもとに総計 655 頭（年平均 47 頭）を捕獲したが、2014 年に国際司法裁判所の「南極における調査捕鯨」訴訟判決を踏まえ、調査目的を限定するなど規模を縮小して実施することとなり、捕獲上限は 25 頭となった。2015、2016 年も上限 25 頭を捕獲したが、2017 年から始まった新北西太平洋鯨類科学調査計画 NEWREP - N P では捕獲対象種から外れている。なお、本種は 1940 年代末に別種と識別されるまでイワシクジラと同種として扱われていた。日本の捕鯨統計で両種が区別されたのは 1955 年からであり、1976 年から IWC においても両種を別個に管理している。



ニタリクジラの分布域（網目は主分布域）



西部北太平洋系ニタリクジラの国別捕獲量の年推移



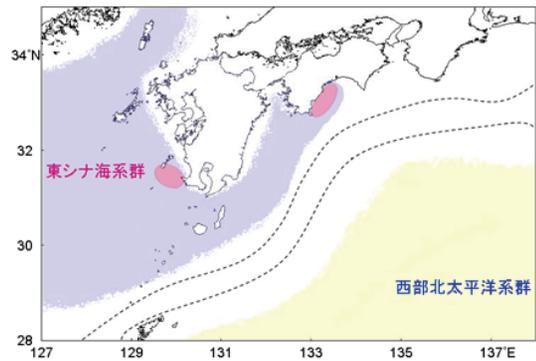
西部北太平洋系ニタリクジラの成長曲線

資源状態

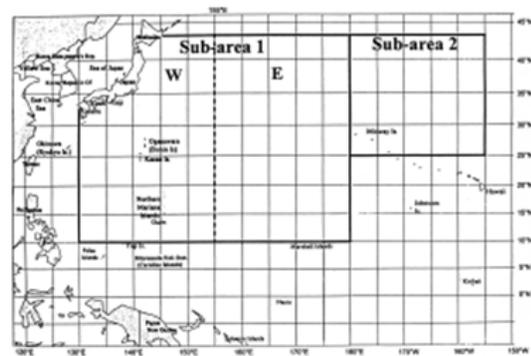
1996 年の IWC 科学委員会において西部北太平洋系群の包括的資源評価が行われ、1996 年当時の成熟した雌の資源水準が同初期資源量の 60～80% であり、Hitter モデルによる資源動向予測により近年増加していることが合意された。これらの結果から、本系群の資源水準は中位から高位にあり、資源動向は増加中であると判断される。

管理方策

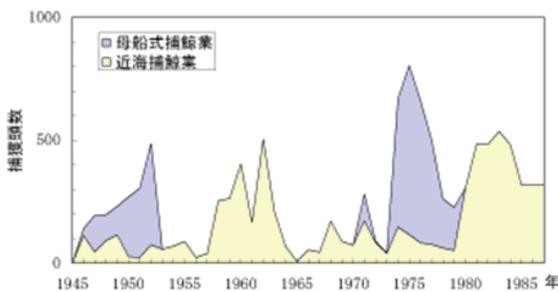
IWC の新管理方式 (NMP) が 1976 年より北太平洋で適用され、西部北太平洋系群は初期管理資源に分類され商業的に利用されていたが、商業捕鯨モラトリアムにより 1987 年漁期を最後に捕獲停止となった。その後、不確実性の下でも資源を安全に管理できる数々の安全策が組み込まれた、ひげ鯨類のための RMP が 1993 年に完成した。本系群については、IWC 科学委員会で、1996 年に包括的資源評価を終え、2005～2007 年に第 1 回目の RMP 適用試験が実施され、3 つの管理オプションと 1 つの調査条件付き管理オプションが了承された。また 2008 年の同委員会で、RMP による捕獲枠算出に使用する 2000 年時点での資源量について 20,501 頭 (変動係数 33.6%) として合意した。その後行われた日本・IWC 共同北太平洋鯨類目視調査プログラム (POWER 計画) や JARPN II などの調査によって得られた目視データから推定された 26,299 頭 (CV=0.185) という北太平洋における西部北太平洋系群の資源量推定値が、2017 年に始まった 2 回目の RMP 適用試験で使用されることが同年の IWC 科学委員会で合意された。



日本周辺におけるニタリクジラ 2 系群の分布



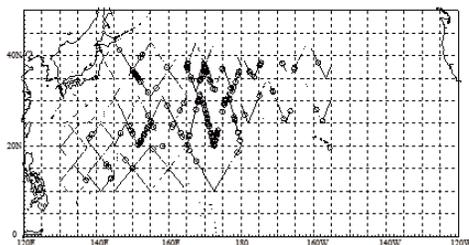
IWC による西部北太平洋系ニタリクジラの管理海域



日本における西部北太平洋系ニタリクジラの漁業別捕獲量の年推移



トップバレルを有する鯨類目視調査船



目視調査を実施した航跡と西部北太平洋系ニタリクジラの発見位置 (1998～2002年 8・9月)

ニタリクジラ (北西太平洋系群) の資源の現況 (要約表)

資源水準	中位から高位
資源動向	増加
世界の捕獲量 (最近 5 年間)	なし (商業捕鯨モラトリアムが継続中)
我が国の捕獲量 (最近 5 年間)	捕獲調査により 25～34 頭 最近 (2016) 年: 25 頭 平均: 27 頭 (2012～2016 年)
管理目標	商業捕鯨モラトリアムが継続中であり、未設定
資源評価の方法	船舶による目視調査から推定した資源量推定値に基づく
資源の状態	26,299 頭 (95%CI: 18,374-37,643 頭)
管理措置	IWC による商業捕鯨モラトリアム実施中
最新の資源評価年	2007 年
次回の資源評価年	2017 年から RMP 適用試験が開始された